

作:悠川 白水
はるかわ はくすい

Final Round
ファイナルラップ!



1.2
周日

目次

目次

おもな登場人物の紹介

スタートシグナル

一周目

二周目

著：悠川 白水

表紙・挿絵イラスト：がっかりうどんぬ

おもな登場人物の紹介



**笠宮
瑠貴**
RUKI KASAMIYA

本作のヒロイン。27歳。学生時代に大学祭のミスキャンを連覇するほどの容姿の持ち主。

笠宮家という地方の富豪のお嬢様で、本来は働く必要性もないが、地元の小学校で音楽の常勤講師をしている。そのためミニ四駆の費用は旅費の一部を除き、一応は自腹である。

普段の立ち振る舞いや口ぶりは、まさに良家のお嬢様。手先が器用で腕前はかなりのもの。



**木藤
遙斗**
HARUTO KITOH

本作の主人公。特徴のなく凡庸な27歳。仕事はこれも平凡なサラリーマン。

ふらりと寄った玩具店で、たまたま子どもの時に使っていたテラスコーチャーの再販品を目にし、ふらりと買ってみたところから復帰している。

腕前は平均以上あるものの、容姿も含め、あらゆる面でごく一般的な男性。



**新倉
麻梨奈**
MARINA NIIKURA

瑠貴の幼馴染みで、新倉模型の一人娘。非常に元気がいいお姉さん。モデラーとしてはなにげに一流で、ガンブラからウォーターラインまでなんでも作れてしまうほどの技量がある。瑠貴のために目立たないが、ひそかにスタイルも容姿も並以上で、美女モデラーとして近県ではそこそこ名が通っている。



後町
AKANE ATOMACHI
朱音

ジャパンカップ東海北陸地区予選の優勝者で、瑠貴とは仲良し。24歳の新米社会人でもある。

母娘二代にわたるレーサー一家で、かつて年間王者も獲得し希代の名選手だった母親とともに、いまや朱音自身も知らない者がいないほどのスター選手となったが、会場での写真撮影の多さが密かな悩み。元気がよく、喜怒哀楽の出る性格。



舞浜
KOZO MAIHAMA
浩三

過去に優勝経験もある大ベテランで、面倒見がいいレーサーの兄貴分的な存在。親しい間柄（榎海除く）からは「まいちん」と呼ばれている。

遙斗の予選でのレースぶりに感心して声をかけ、朱音の母親とともに、遙斗に公式大会やレースでの心構えを説く。南関東地区予選を三位で通過、ジャパンカップへ出場する。



後町
NAGISA ATOMACHI
凧沙

朱音の母親で、48歳。独身時代には公式大会オープンクラス優勝9回、年間チャンピオン戦優勝1回など多くのタイトルを獲得し、結婚し朱音を産んだ後は育児のため第一線を退いた伝説的レーサー。

一人娘の朱音に、自らの技術と経験の全てと同時に、ついに果たせなかったジャパンカップ優勝の夢を密かに託している。



榎海
FUMIHIDE KASHIUMI
史英

前年度のジャパンカップチャンピオン。普段は控え目なベテランだが、公式大会オープンクラス、チャンピオンズで多数の優勝を誇り、若い頃から凄腕として知られた。

かつて凧沙を決勝で破り、ジャパンカップを制した経験を持つ、史上唯一のジャパンカップ二度優勝の経験者。今は1児の親で、嫁ブレーキには逆らえない家庭人でもある。

スタートシグナル

しのぎ 鑄を削る。つばぜ 鑄迫り合い。名勝負。

ありふれたこの陳腐な表現ほど、今この瞬間にふさわしいものはない。

「ファイナルラップに突入！ 先頭は四……いや五コース、いや、また四コースが抜き返した！」

真夏の暑さに負けず劣らず、熱気のこもった声を上げる司会者の声など、きっと耳には届いていないだろう。

男女合わせて五人の少年少女は、その目の前に広げられた純白のコースレーンと、己のマシンを食い入るように見つめていた。

スロープを上り、フェンスとローラーが擦れる音を立てながら、一八〇度のコーナーを二台のマシンがいち早く抜けていく。他の三台は何秒も引き離されていた。

呆れるほど長い直線を、時に横一線に並び、時に僅かに前へ出て、そしてまた追い付きながら駆け抜ける。

しかし、加速に乗ったマシンには酷とも言える……下りのスロープ。

ガチン、と鳴り響いた硬い跳躍ちょうやく音が、二台のせめぎ合いに終止符が打たれた合図だった。

——負けた。

少年はがっくりと肩を落とし、左隣の少女は満面の笑みでガッツポーズ。

コースアウトした自分のマシンを係員から受け取ると、自然と目頭が熱くなってきた。そう思ったときには泣いていた。

「男子だったら泣かないのっ」

後ろから威勢のいい声が聞こえて振り向くと、さっきまで対戦相手だった少女がいた。

「あなたのそのマシン、すごかったじゃない」

少年と同じ年代であろうが、背はやや低い。首の後ろで、縛った髪髪の短い房がちょこん、と揺れている。服装をはじめ背格好は、よく学校のクラスにもいる女子と大差ないが、涙でくすんだ視界越しでも、顔立ちがとても可愛い子だなと少年は思った。

しかし、何よりも悔しさが先に来る少年にとっては、そんな相手の容姿など気休めにもならない。むしろ余計に腹が立ってきた。

「うるさいな。次も頑張れよ」

少年は怒気を含んだ声で言うと、そのまま立ち去ろうとする。

「待ちなさいよ」

少女は小走りに少年へ歩み寄ると、その両肩を掴みながら正面へと回り込む。

「泣かないの」

優しく言いながら、少女は少年の額に己の額を合わせる。

「なんとかなるから」

言葉は、少女の額と両手のぬくもりと一緒に、体の中へと染み込むように少年へと入っていく。その言葉とぬくもりは、今まで体の中にあつた何かとぐろを巻いたものを、砕くように、溶かすように体から奪っていく。未だ経験したことがない、とても不思議な感覚だった。

一瞬の後、額と両肩からぬくもりが消えたのを感じ、両目を開ける。少女はスカートのポケットからハンカチを出して、少年に押しつけようとするところだった。

「また、いつか対戦しましょ」

涙で視界がよく見えない中、その少女はそのまま後ろを向いて走っていった――

1周目-1

「……んっ、ん」

男は、間の抜けたような唸^{うな}り声を上げて目を覚ました。

懐かしい夢を見た気がする。

薄手の布団から出ないまま、男は懐かしく思う。子どもの頃に出たミニ四駆ジャンカップ。自信満々で出場して予選敗退したのは今でも覚えている。しかも同学年らしき女子に負けたとあっては立つ瀬もない。

あの子はどうしているだろう、と思ったのはほんの一瞬。そもそも会うことはないだろうし、仮に偶然出会っても、お互い既にいい歳の大人となっているから分かるまいが。

「……っと、今日は出かける日だったな」

思い出したかのように眩くと、布団を跳ね飛ばすようにして起き上がる。何せ、またまた地方に単身赴任してきたばかり。その最初の休日はやることがあった。

朝食作って歯磨きして顔洗って用足して。ようやく着替えに取りかかる。

着替え終わると、机の上に鎮座していた工具箱を引っ掴む。

夢の出来事が終わってから一度辞めた後、大人になってから再びミニ四駆を再開して約半年と少し。

単身赴任してきてまずやりたいのは、近くにコースが置いてある模型店があるかどうかを探し、一度見に行くこと。

ネットで探したところ、かろうじて一件はそれらしき店があるらしい。マシンは整備済み。走らせたいがまあ期待はしない。

安っぽい賃貸住宅の扉を開けると、アブラゼミが慣らしてない旧型シャーシのような騒音を鳴らしていた。

目的の模型店は、徒歩十分とネットの^{どうてい}道程計算は表示してくれたが、気温三十度では効かないような外を十分も歩くのは、ある意味^{ごうもん}拷問であろう。

かといって車で行く程の距離とは言えず、そもそも車内はオーブントースター同然となっているのを想像すると、外を歩くよりもぞっとする。

軽く汗をかきながら歩き、ようやくそれらしき店に辿り着いたのは、およそ十五分後ぐらいだった。道程計算の嘘つきめ、と男は内心毒づく。

田舎道に面した模型店は、荒れたアスファルトの駐車場が六台分。一階は店舗で二階は住居らしき古風な作りは、いかにも昔からやっています、な雰囲気醸し出していた。

正面から見て左隅には古めかしいテントが張られ、ホームセンターで売ってそうな安い柵で囲われている。柵の中には、灰色の物体が地面に敷かれているのが見えた。ごく一般的にしてスタンダードな市販品コース、ジャパンカップ・ジュニアサーキット。

そこまでは大して驚きも感慨もなかったが、そのさらに奥に視線をやると初めて少し驚く。

コースの周りには、三人ぐらいの小学生らしき子どもがいるのだが、一人は子どもに囲まれ、一人はそれを見守るように奥の日陰でちょこんと座っているのは、似たような歳のごく若い……女性だった。

「これ、いきなり変な音がしはじめたあ」

子どものうち一人が、スイッチを入れたまま子どもの中心にいる女性に突き出す。

「ホントねえ、でもさっきまでは普通だったのにねっ……^{るき}瑠貴、どう思う？」

「貸してみても^{まりな}麻梨奈」

麻梨奈と呼ばれた女性は、瑠貴と呼ばれた座ったままの女性のところへ、子どものマシンを持って行く。スイッチが入ったままのマシンを耳元に当て、目を瞑って音を聞くことコンマ一秒。

「これはね」

静かにそう言いながらスイッチを切ると、ボディキャッチを外してボディとともに膝上へと置き、電池も抜くとモーターカバーとギアカバーを手際よく取り、それも膝上へ。電池を底面部から外したあたり、ARシャーシだろう。

「モーターのここを見てごらん」

子どもを呼び寄せた後、モーターを取り出して何か見せている。

「このモーターのピニオンギア、半分しか填ってないでしょう？　これが走らせているうちに緩んでしまったから、いきなり噛み合わせが悪い音がするようになったの。だから」

言葉を切ると、モーターを左手に持ち替えて、右手を横に伸ばしておもむろに小型ハンマーを取り出すと、軽くピニオンギアを叩くこと数回。

「これでいいと思うわ。でも、また緩むようならもう交換しないとだめだからね？」

子どもを見て優しく言いながら、再び手際よく組み立てる。手元を大して見ないでも組み立てる様を見て少し感心する。よほど慣れてないとできない芸当だ。

「はい、どうぞ」

ボディキャッチを填めて、子どもに渡す。子どもは喜んで再びコースへ。

「こらっ！　『瑠貴お姉さんありがとうございます』ってお礼言いなさいっ！」

「いいよ麻梨奈、大したことじゃないから」

「でもさっ……？」

麻梨奈と呼ばれた女性の声が途切れる。気づくと、二人の女性の視線がこちらをしつかり捉えていた。

一瞬、子どもの声とアブラゼミの音が、空間を支配する。

「お、そこの兄ちゃんもミニヨンやりにきたのかいっ？」

麻梨奈と呼ばれていた、二十歳代半ばとおぼしき女性が、この季節らしいような、威勢のいい声を上げる。

「ええ、まあ、そんなところですが」

「うーん？ でも見ない顔だよねえ？ また瑠貴を目当てにどっから遠征にでも来たクチかいっ？」

すたすたと歩み寄ると、麻梨奈は面白いものを覗き込むように顔を見る。笑顔ではあるが、その目は一瞬前と変わって、微妙に笑ってない。

麻梨奈の奥、座ったままの瑠貴に目をやると、被った白い帽子に手を当て、しかめるように深く被り直す。

「え？ いや何だかよく分かりませんが。僕は、先日この辺に引っ越してきたもんで、家から最寄りの模型店なので来てみたんですが……」

そう言うと、麻梨奈と瑠貴のいささか警戒した雰囲気、風船が弾けるように消えてなくなった。

「何だい、じゃあ新しいお仲間さんだねっ。こんな暑いとこ突っ立ってないで、日陰に入りなよっ」

麻梨奈は、半ば強引に手を引いて、テントの中に招き入れた。



ぶしゅっ、とプルタップが開く音が鳴ると同時に、麻梨奈は左手の冷えたノンカロリーコーラをぐいっとあおる。

「あー、うまっ……私は、^{にいくらまりな}新倉麻梨奈っていうんだよ。で、こっちが」

^{かさみやるき}「笠宮瑠貴と申します。よろしくお願ひしますね」

軽く一礼すると、両手に持ったレモン味のサイダーをゆるりと傾けて、湯飲みでお茶でも飲むかのように、こくり、こくりと静かに喉を鳴らして上品に飲む。

^{きとうはると}「俺は木藤遙斗^とっていいます。数日前に引っ越してきました」

名乗ってから、ペットボトル入りのジンジャーエールをぐいっ、とひと飲み。冷えた炭酸の刺激が心地いい。

「あー、暑っ……こんな暑いと、店開けててもお客さん来ないよね」

「店ということは、新倉さんは普段はサービス業で？」

何気なく麻梨奈に聞いてみた遙斗に、一瞬キョトンとする麻梨奈と瑠貴。

「おー、そういえば言ってなかったねっ」

そう言うと、麻梨奈は左手の親指を立て、模型店の方を指す。

「ここの店は、あたしと父の二人でやってるのさっ！

店長は父だけど、まっ、二人しかいないしあたしは自動的に副店長だねっ！」

心底面白そうに大笑いする麻梨奈の指す指先の向こう、古風な模型店の看板にはデカデカと『新倉模型』と書かれていることに、遙斗は初めて気づいたのだった。

太陽が頂点に向かってまっしぐらな時分、外はますます暑い。

「ホント言うと、今日は月例レースの日なんだよっ」

^{うっ}その太陽に何か感染されてるのか、麻梨奈の声は時間が経っても元気である。

「でもまっ、このド田舎の小さい店だし、いつも来てくれるのは子ども達いっぱい^とと瑠貴ぐらいだねっ！

あたしはそれで十分だけど、今日は久しぶりに瑠貴の本気が拝めるかなって、ちょっと期待してるよ遙斗くんっ」

ぽんっ、といきなり背中を叩かれる遙斗。

——瑠貴の本気。

すぐに遙斗は合点がいった。先程聞いたところ、麻梨奈は近県でもちよつとは名が知れたモデラーらしいが、レースはやらないらしい。

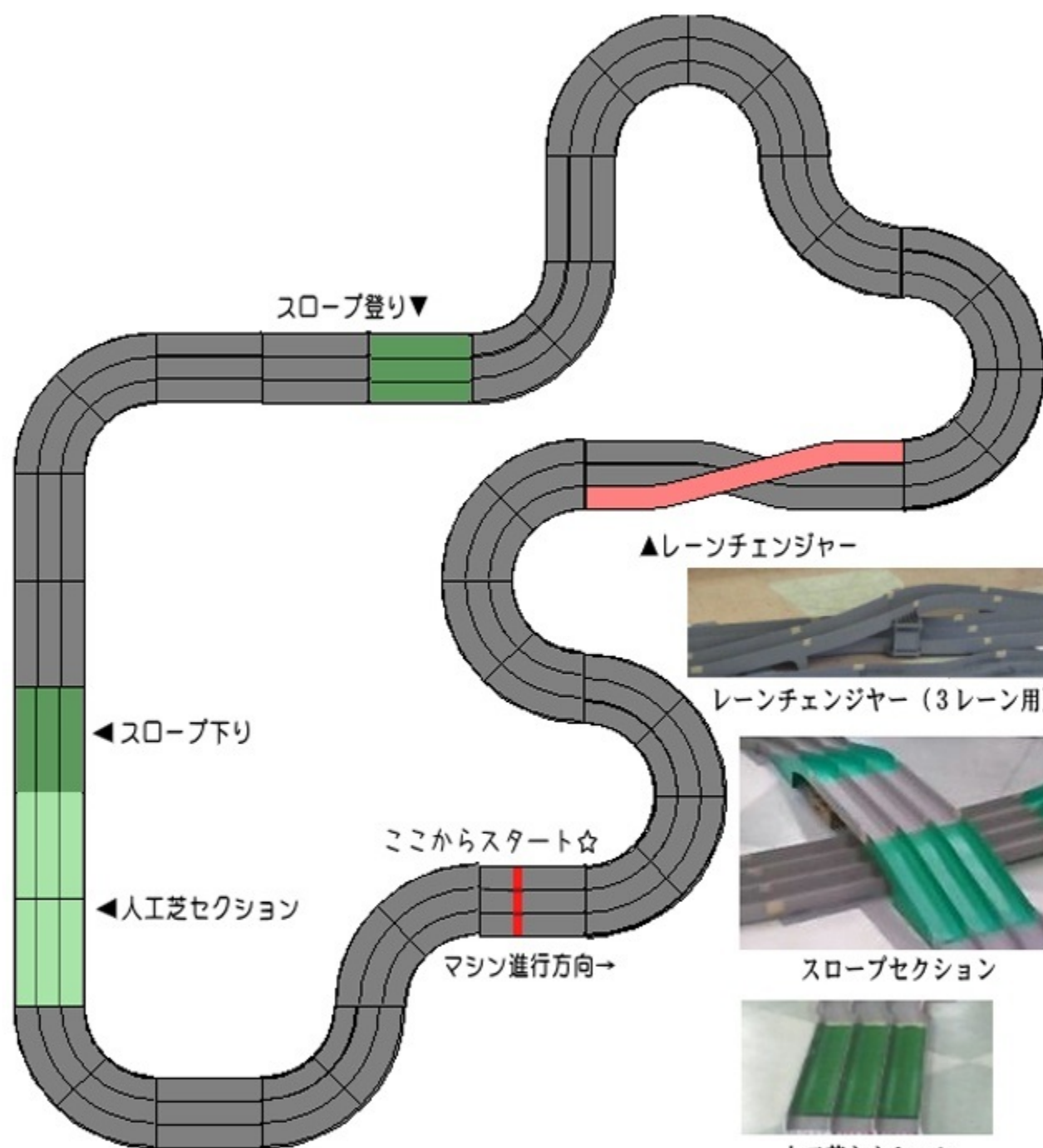
つまるところ、この場にいる大人で瑠貴の相手ができるのは、見たところ似たような歳の遙斗だけであり、いつもは本気でやらない、つまり子どもでは太刀打ちできないほど瑠貴は強いということでもあった。

遙斗は改めてコースを見る。

ジャパンカップ・ジュニアサーキット、ざっと四組分といったところか。『ここからスタート☆』と、丸っこい字で適当にダンボール箱に書いてある場所から右は、カーブを多く使いうまいこと組んである。

そして左側は、途中でコース色が緑色のパーツがあり、その緑色が灰色の九十度カーブと、ストレートパーツ四枚分を挟んでいる。高さ十一センチのアップダウンセクション、テーブルトップだ。

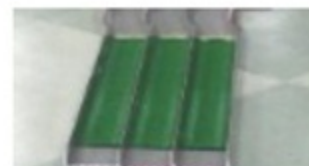
テーブルトップ下りの着地点には、安っぽい人工芝が敷かれており、着地点の芝を抜けカーブひとつ曲がってスタート位置に戻る。地味だがそれなりの技術を要求される、テクニカル・コースである。



レーンチェンジャー (3レーン用)



スロープセクション



人工芝セクション

「子どもたちの大会が始まる前にやりましょう」

振り返ると、瑠貴がボディを開けて電池を入れるところだった。見たところ、ボディは白をベースに金色のエングレービングを施したイグレスか。白色のVSシャーシは、材質強化型シャーシである。

組み方は無駄がなくシンプル。フロントバンパー・リアステーともに既存のカーボンプレートで強化してあるが、さらにその上をフロントバンパーとリアステーの上部を覆うように、プレートやウェイトが覆っている。

遙斗も工具箱を開けて、マシンを取り出し早速電池を入れようとする。お互い、メーカーのアルカリ電池を用いるのは、選手権ではその電池しか使えなくなっているからである。

「おおっ、テラスコーチャーとはなかなか渋いねっ」

感心したような声の麻梨奈の視線の先には、濃紺をベースに銀や赤文字を散りばめたデザインのテラスコーチャー。カーボン混合材製のスーパー2シャーシをベースに、組み方に無駄はなく、見た目は割とシンプルである。

「では、早速始めましょう。よろしくお願ひしますね」

瑠貴はゆっくりと立ち上がり、コースの方へ歩いて行く。

長く綺麗に切りそろえられた黒髪に、整った顔立ち。白磁色の華奢な身体を、白いワンピースと白い帽子で包み込んでいる姿は、どこかの深窓の令嬢といっても違和感がない。真夏の太陽の熱で、そのまま溶けてしまいそうな錯覚を覚えるほど、儂くも可憐な雰囲気があった。単刀直入に言えば、この場に似合わないほどの……美女である。

「あ、こちらこそ、よろしくどうぞ」

見とれていたのも一瞬、遙斗も瑠貴の声に應えると、スタート位置に向かう。

「三周勝負だからねっ」

同じくスタート位置に来た麻梨奈が、掌を見せるように真っ直ぐ左手を伸ばす。それを確認し、遙斗と瑠貴はスイッチを入れ、遙斗はインコース、瑠貴はアウトコースにマシンを構える。双方とも、駆動音からギアの噛み合う音はわずか、ほとんどモーター音しかない。

「用意……スタートっ」

麻梨奈の声とともに、二台のマシンが同時にコースイン。横一線で前半のコーナーセクションへ入る。

「はええ！」

周囲の子ども達の驚いた声。二台ともあっという間に後半のテクニカルセクションへ

。ここまでは、瑠貴の方が僅かに速い。

一般的には、遙斗のスーパー2シャーシよりも、瑠貴のVSシャーシの方がやや小回りが効くのは確かである。しかしそれを差し引いても、瑠貴のマシンのコーナーワークは群を抜いていた。

遙斗のマシンも、空転時間が優に一分を超えるローラーを搭載するだけに、コーナーワークにはそれなりの自信がある。そのためコーナーの多い前半セクションで、多少なりとも差を付けるのが遙斗の目論見だったが、まさか逆にリードされるのは計算外だった。瑠貴は想像以上に手強い。そのまま緑色のスロープに突入する二台。

「あら」

「なに」

瑠貴の感嘆の声と、遙斗の驚きの声が交錯する。

スロープを上がり着地しようとして落下軌道に入った瞬間、フロントバンパーとリアバンパーの上部にある、補強と思っていたウェイトとマルチプレートが、蝶番のように上へと開いた！

着地すると同時に、その開いた箇所も再び元通り閉じ、着地の衝撃を吸収。瑠貴のマシンは何事もなかったかのような綺麗な着地を披露し、テーブルトップのストレートを駆けてゆく。

さりげなくついてたウェイトや補強プレートがすべて、小型の衝撃吸収用カウンターウェイト、いわゆるマスダンパーだったことに遙斗は驚く。前後を均等に衝撃吸収する上、上下左右のストロークが大きく安定している分、通常のマスダンパーに比べても効果が高いようだった。

遙斗のマシンは、低重心とブレーキ制御がメインのマシンである。必要最小限まで絞り込んだ装備による徹底した軽量化で、抜群の加速性能を武器に減速によるロスを補う。低重心化と確実に水平飛翔させる絶妙な車体バランスにより着地を安定させ、マスダンパーは後部に、こちらも均等可動タイプのスクエア型をひとつ装備するのみだ。

瑠貴は、確実に減速する遙斗のマシンから瞬時にコンセプトを察した。テーブルトップを攻略するには減速が一番確実な方法だが、ブレーキ減速によるロスは普通看過できるものではない。しかし車体重量と小径タイヤによる足回りの軽さのアドバンテージは、減速から回復して再加速するまでの時間、いわゆる立ち上がりを他のマシンより早くできる大きな利点がある。

実際、減速の大きさの違いでリードを許した遙斗のマシンは、素晴らしい加速で一気に瑠貴のマシンとの差を詰めにかかっていた。

「一周目は瑠貴が取ったねっ！」

しかし、完全に差を詰めるには至らず、およそ車体一台分の差をつけて瑠貴のマシンがスタート位置を駆け抜ける。

僅差の好勝負だったが、二周目も一周目と似たような展開。差が車体一台半に広がる。しかし、三周目は遙斗の方がコースの短いイン側。まだ行方は分からなかった。

「追いつかれた」

瑠貴の桜色の唇から、変わらぬ調子で言葉が漏れる。スタートしてすぐの位置にある立体レーンチェンジで、遙斗のマシンがイン側、瑠貴のマシンがアウト側にレーンを変えると、距離の短い遙斗のマシンが瑠貴のマシンの横に並んだ。

「よし」

さらにインコースの利を生かし、遙斗のマシンは車体半分程度のリードを奪い逆転、テーブルトップに侵入する。

減速して侵入する遙斗のマシン。

一瞬遅れて侵入し、花びらを開くように華麗に舞う瑠貴のマシン。

先に着地したのは.....純白のマシンであった。

「空中で抜いたっ!？」

麻梨奈の少し興奮するような声。侵入速度が速い分、瑠貴のマシンのの方が飛翔速度が速く、距離が長い。まさに空中で抜いたように周囲は見えただろう。

そのまま僅かなリードを保ち、瑠貴のマシンは先にゴールを駆け抜けた。

真夏の炎天下、外出は正午までか夕方からか、に限られる。

「気をつけて帰るんだよーっ」

太陽が頂点からわずかに傾いた頃、子ども達は自転車に飛び乗り、あるいは歩いてそれぞれの帰路につく。帰ったらちょうど昼食の時分、といったところ。

「さてさて、何事もなく無事終了っど.....瑠貴、それに遙斗くんもお手伝いあんどねっ」

タオルで顔を拭きながら、麻梨奈はそれぞれに笑顔を向けたが、そこで表情が突然張り付く。

「そういえばさ、来週は全日本選手権ジャパンカップだったねっ！」

麻梨奈は、思い出したかのように大きな声を上げると、瑠貴に向かって拝むように両手を合わせる。

「ゴメン瑠貴っ、来週の土曜は店は盆休みだけど、両親と先祖参りに行かないと.....」

「.....そうなんだ。でもお盆だし仕方ないね」

申し訳なきように言う麻梨奈に、残念そうに答える瑠貴。世間は来週からお盆休みに入る。気候としては、今が一番暑い。

「全日本選手権？」

遙斗はおうむ返しに聞き返す。

「そう、来週は夏の全国大会だよっ」

春夏秋冬を通して行われているミニ四駆の公式大会のうち、夏に行われる全国大会がFDBサマースペシャル・タミヤミニ四駆全日本選手権ジャパンカップ。ようやく遙斗はそのことを思い出した。

「瑠貴は出場権を持ってるから、どうしても連れてってあげたいけど……」

いささか元気なさげな麻梨奈を見て、瑠貴は作ったように笑顔を向ける。

「そのことは仕方ないわ……それよりせっかくだし、麻梨奈も遙斗さんも私の家に来てランチしません？ 冷たいもの用意させますので」

「おっ、いいねっ。じゃあ毎度だけどお邪魔しちやおうかしらねっ」

瑠貴の提案に即答する麻梨奈だが、遙斗は少し考える。いくら何でも、初対面でいきなり女性の自宅は、丁重にお断りしておくのがマナーな気もするのだが、そう考えているうちに、話はホームストレートを驀進するマシンのように加速中。

「遙斗さんは歩きっぽいけど、私いつものスクーターだし、どうしようか」

「大丈夫、遙斗くんはウチの軽に乗せてくから」

「そう？ なら先に行ってるよ」

「りょーかいつ」

あっという間に会話を終えると、瑠貴は荷物を持ち、すたすたとあさっての方へ歩いて行く。

「って返事してないのに行くことになってるし」

同じく、車のキーを取りに店の入り口へ向かおうとしていた麻梨奈が、くるりと振り返り向く。

「私の助手席と瑠貴の家がそんなにイヤ？」

「いや別にそういうわけでは」

「なら決まりっ。遠慮することないって、行けば分かるからっ」

自他共に認めるところだが、遙斗はあまり口が達者ではない。この炎天下、遙斗には言い返す気力も沸かなかった。

「手狭だけど我慢ねっ、瑠貴の家は十分ぐらいのトコだからっ」

とつくに生産停止になっている型の軽バンを操りながら、麻梨奈は助手席の遙斗に声をかけた。フロントガラスには、数メートル先を瑠貴のスクーターが走っている。シルバーとブラックで塗り分けられた、パイプ調のデザインと太いタイヤがワイルドチックな、なかなか瑠貴のイメージに似つかわしくないシロモノである。

「仕入れとかで使ってる車ですかこれ」

「そうだよっ、古いけど、サスペンションが今売ってる軽バンにはないくらい頑丈でねっ、排ガス規制で車検に引っかかるまでは使いたいねっ……ほら、あの左手のが瑠貴の家だよっ」

「……………」

遙斗は、頬に一筋の汗が伝ったのを感じた。

麻梨奈が右手で差したその先は、とりあえず真っ先に大きな木と囲い柵が目に入った。そしてその奥には、テレビの特番で見るとような白亜の豪邸がデンと見えたりする。

あの家が瑠貴の家で間違いないなら、瑠貴は紛れもなく、世に「名家のお嬢様」とか「深窓の令嬢」とか、あるいは「セレブ」などと呼ばれている人種に相当するんじゃないかと遙斗は思った。

「さ、ついたよっ」

大型車二台分以上の幅はある、格子状の門扉が勝手に開くと、瑠貴のスクーターはそこに吸い込まれていき、麻梨奈と遙斗が乗る軽バンもそれに付いて門をくぐる。

行けば分かるから、と言った麻梨奈の言葉の意味が、遙斗は少し分かったような気がした。

「お帰りなさいませ、瑠貴お嬢様」

門扉の方から、家政婦らしき小綺麗な格好の中年の女性がひとり瑠貴に歩み寄る。

「ただいま。汗かいたからシャワー浴びるわ。ランチと洗濯は全員分お願い」

「かしこまりました」

ヘルメットを脱ぎ家政婦に渡しながら、手短かに会話する『令嬢・笠宮瑠貴』を、遙斗は車から降りながら見ていた。新倉模型にいた時と一見すると変わらないように見えるが、気配の端々からは別人のようなオーラが伝わる。

「シャワー室は三人分ありますので、汗を流して行ってくださいな。麻梨奈は分かっているからいいでしょうけど、遙斗さん、うちのお手伝いさんに案内させますので、くつろいでくださいね」

言い終わるかどうかのうちに、家の方からさらに数人の家政婦らしき人が来て、遙斗は思考停止したまま流されるように従っていると、気づいたらシャワー室らしき場所の前に立っていた。

「湯浴みされましたら、下の籠にお客様用の肌着とバスローブがございますので、とりあえずはそれをお召し下さい。今着られているお召し物は、お帰りの頃までに洗濯して乾かしますので、上の籠にお入れください」

「は、はあ……ありがとうございます……」

一通り説明すると、家政婦はいずこかへと下がっていく。シャワー室の前には遙斗だけが取り残された。

「どこの王国ホテルだよ……」

驚き半分、呆れ半分で独り言を呟くと、とりあえず服を脱いで遙斗はシャワー室に入った。

「こう暑い日はソーメンに限るよねっ」

麻梨奈はずるずるっ、と実に旨そうな音を立ててソーメンを喉に流し込む。隣で音ひとつ立てずにお素麺をすする瑠貴に比べると、育ちの違いが悲しいほど浮き彫りになっているような感もある。

シャワーを浴びて着替えた後、通された部屋にあるゴージャスな円卓に並んでいたのは、夏の庶民的食べ物の代表格、きっちり三人分の素麺だった。

豪勢なものを勝手に期待してた遙斗には拍子抜けだったが、素麺も汁も料理の鉄人が作ったのか、何だか異様に旨かったりする。しばらく安物の素麺は食べられそうにない。

「でねっ、来週の土日のことなんだけどねっ」

鉄人級の素麺を一本残さず平らげた後、麻梨奈は斜め前に座る遙斗に声をかける。円卓を三角形の頂点のように囲んでいるので、三人ともお互いを正面に見ることができた。

「私は行けないもんだから、全日本選手権は遙斗君が運転して瑠貴といっしょに行つて欲しいんだけどね、できるかいっ？」

「できなくはないでしょうが……僕の手じゃ二人は手狭だし、そもそも泊まる場所はどするんです？」

「それについては心配には及びません」

後ろから声をかけられ、思わず遙斗が振り向くと、アイスコーヒー三人分をトレイに

乗せた、初老の男性が立っていた。

「車は当家所有のハイブリッドバンをご用意しますし、向こうでのお泊まりは現地の最高級ホテルを二部屋確保しております。

ハイブリッドバンには、ナビゲーションも自動料金支払装置も装備してありますので、ご自由にお使ってください。ホテルも既に支払いは済ませておりますので」

物静かに、しかし自信を持って答えると、初老の男性はアイスコーヒーのグラスを三人の前に手際よく置いてゆく。遙斗は本物の執事を始めて見た。

「至れり尽くせりですね.....でも、そもそも笠宮さんはいいんですか？ 邪な気持ちは毛ほどもありませんが、一応余所の男性とふたり旅ですよ？」

出されたアイスコーヒーを、瑠貴はブラックのままストローで一口吸う。

「.....別に私は構いませんよ。私は車の運転免許がありませんし。

あと、土曜はコンクールデレガンスの全国大会と同時に、本大会の最終予選をやる日ですから、遙斗さんも最終予選で上位三名までに残れば、日曜の本大会に出られますよ.....私一人で参加はちょっと、ね.....」

最後はやや歯切れが悪そうに言うと、ちらりと麻梨奈の方へ視線を送る。

「.....あ、ほら瑠貴は見て分かるとおり可愛いでしょ？ その邪な気持ちの塊みたいなのが、大会に行くときよく寄ってくるんだよねっ」

麻梨奈は、出された時点で大量のミルクが入っていたアイスコーヒーを、ちゅーつ、と慌ててストローで啜りつつ、右手で携帯を出して開き数回操作、画面を遙斗に見せる。

「.....？」

呼び出された画像ファイルには、王冠と紅マントを装備し、少し照れくさそうにする瑠貴が映っていた。可愛い。

「何の画像？」

「大学四年のとき、瑠貴が学祭のミスキャンを二連覇した際の」

「ちよっ、ちよっとお!? 何恥ずかしいもの見せてるのかな麻梨奈ッ!?!」

臆面もなく言う麻梨奈に、耳朶まで真っ赤にして叫ぶ瑠貴。席を立ち脱兎のごとく遙斗に駆け寄ると、横から麻梨奈の携帯を分捕る。

「こ、これはダメです、もう何年も前の画像なので.....見なかったことにしといて下さい」

消え入りそうな声で言いながら、麻梨奈に携帯を上手投げで投げつける瑠貴。それほど勢いはなく、余裕でキャッチする麻梨奈。

「あははっ、ごめんごめんっ。

こんな具合で瑠貴は世間的にも美人で通っちゃうもんだから、色々大変だとは思いますが、しっかりついてやってちょうだい。私は、インターネット速報で応援してるからさっ。

あ、本当に困ったら、瑠貴は他の女性のレーサーさんと仲いいし、助け求めればいいから」

.....助け求めないといかんぐらい、ナンパ多いのか.....？

などと遙斗は思ってしまいが、未だ男性が七割方を占めるだけあって、さもありなんという気はする。ジャパンカップに移動手段に宿舎込み、凄腕の美女レーサーとふたり旅と、至れり尽くせりツアーで行けるのはいいが、やはり世の中うまいだけの話はない、と思う遙斗だった。



開いてる店はコンビニぐらいの時間に早起きしても、既に外は明るかった。
「じゃあ、今日明日とよろしくお願いしますね」

白色のマキシ丈のワンピースに、空色のタンガリーシャツ。後ろで縛った髪の上にカンカン帽を載せた瑠貴は、軽く頭を下げる。

「いえ、こちらこそよろしく」

遙斗も同じように軽く会釈。こちらは、ギンガムチェックのシャツに黒の七分丈パンツと軽装。

用意されたハイブリッドバンの後部トランクには、色々な荷物が既に詰め込まれており、最後に瑠貴と遙斗のマシンボックスを詰め込む。そして瑠貴は助手席、遙斗は運転席へ。ルーフのソーラー充電による自動空調が働いているため、エンジンをかけずとも車内は涼しい。

「じゃあ早速行きますよ」

遙斗はエンジンをかけ、お手伝いさん数人に見送られる中、出発した。

高速道路を使うとはいえ、会場までは県境を大きく越えてさらに向こう。およそ三時間ぐらいの道のりとなる。

「そういえば、ひとつどうしても疑問に思ってたことがあるんですけど」

高速に乗ってしばらくしてから、視線は前から離さず問う遙斗。お互い遠慮がちでなかなか話が切り出せないようで、これが車中で初めての会話だった。

「何かしら？」

助手席の瑠貴は、問われて遙斗の方を見る。

「どうしてセレブなお嬢様が、自宅でコース作らずに新倉模型店へ行ってるんです？」

そう。

ジャパンカップ・ジュニアサーキット自体は、ひと組で二万円もしない。笠宮家の財力と敷地なら、新倉模型店にあるコースよりもずっと立派なコースを作るのは、造作もないはずである。

「そうね、みんなそう言うんだけど」

再び前を向き、少し遠いような目をする瑠貴。

「私がまだ小さかった頃、ミニ四駆を最初にして買ったのは、麻梨奈の家に初めて遊びに行ったときのことだったの」

瑠貴と麻梨奈が幼稚園から高校まで一緒だったことは、先週笠宮家で昼食をご馳走になったとき、遙斗は二人から聞いていた。

「だからかな。あそこが原点っていうか、すごく落ち着く感じがしてね.....今のコースは元々お店にあったのと、私が個人で買ったのを足したのが半々ぐらいになってますけど」

いわゆるホームコースというやつなのだろう、と遙斗は思い少し羨ましくなる。復帰

してすぐの頃、子どもの頃に通っていた店を尋ねようとしたが、とうの昔に潰れてしまっていた。

「あとは.....ううん、何でもありません」

瑠貴は続けようとした言葉を呑み込むように、歯切れ悪く話を切った。遙斗はさほど気に留めず、話題を変える。

「そういえば、笠宮さんは朝食は食べてこられました？」

「いいえ、朝早かったので胃が受け付けなくて.....」

「じゃあ同じですね。もうすぐサービスエリアのようですし、何か食べましょうか」

そう言っているうちに、二人を乗せた車はサービスエリアの入り口に吸い込まれていく。駐車場の埋まり具合は六割方で、売店棟のすぐ近くに車を止めることができた。

「あの笠宮さん、サービスエリアで食べ物買ったりとかは.....」

「.....私、そこまで世間離れしてるつもりはありません」

瑠貴はあからさまにムツとした顔で答えると、無造作にドアを開けて車を降り、さらに車内を覗き込むようにして頭だけ突っ込み、遙斗を悪戯っぽい笑顔で睨め付ける。

「あと、笠宮さんは堅苦しいので、呼ぶときは瑠貴で構いませんから」

「最終予選ってどんな感じなんです？」

売店棟のレストランスペースで、和食セットの卵焼きをつまみながら、遙斗は瑠貴にレースの様子を聞いていた。何せ五レーンのコースを走らせる大会に出るのは、子どもの時以来となる。楽しみもあるが、それ以上に不安の方が大きい。

「麻梨奈と行った近畿地区予選は、参加人数制限がありましたので、ぴったし二五〇〇人でしたけど」

瑠貴は、洋食セットのバターロールをそっと千切りながら答える。なお、夏の全日本選手権ジャパンカップは、ここ数年は最終予選に参加人数の制限枠を設けていない。近畿地区予選は会場の収容能力の都合で、人数制限枠があったということだった。

「ジュニアクラスとオープンクラスに分かれていて、私達が出られるのはオープンクラス。コースはそれぞれ別ですから、間違える心配はないですよ。」

百番単位で区切って呼び出されますから、聞き漏らさないようにしてくださいね。二回は一次予選のチャンスがあるはずです」

優雅な手つきでマーガリンを塗り、パンを口に運ぶ瑠貴。お手頃価格なはずの朝の洋食セットが、遙斗にはやたら高級そうに見えた。冷製スープを一口飲み、瑠貴は再び話を続ける。

「一次予選を勝つと、通過証明のタスキっていう紐がもらえるので、無くさないように」

してくださいね。二次予選に出れなくなっちゃいますから。

二次予選を勝つと次は準決勝ですが、タスキじゃなくて決勝参加券っていうチケットがもらえます。みんな薄紙って言ってます。

準決勝前には、ジュニアとオープンの各コースとも少しコースをメンテナンスします。その作業の間に、コンクールデレガンスをやってですね、それが終わったら各クラスの準決勝です」

「……結構長い道のりですね」

遙斗は味噌汁を啜り、海苔で巻いた白米を口に運びながら感想を述べた。決勝を含めると、最低でも四戦はしないといけないことになる。

「準決勝を勝つと、ピットに戻ってのセッティング変更はできないですから注意してくださいね。

準決勝を勝って、決勝で三位以内に入ればめでたしめでたし。日曜日の本大会に出られるわけです。終了時間は大体十八時ぐらいかな？」

すらすらと説明を終えると、瑠貴は残りのバターロールをもぐもぐする。ゆっくり食べているように見えて、食事の進み具合は何故か瑠貴の方が早かった。

別に瑠貴が早食いなわけではない。遙斗が食事の手をあまり動かしていないだけなのだが、そのことに本人は気づいていないのである。

「私は、一ヶ月前の地区予選で優勝してるので最終予選は出ませんから、外野から応援してますね」

「でも笠……ええと、瑠貴さん。出ないなら何で今日から会場に行くんです？」

遙斗は食事の手が止まっていたことに気づき、ペースを早めながら瑠貴に聞く。自分のために前日から行くのだったら申し訳ない気分だが、微笑を浮かべる瑠貴の答えは、遙斗の予想とは違っていた。

「コンクールデレガンスの全国大会、麻梨奈が気合い入ってたから……作品預かってるし、代理とはいえ出ないわけにはいかないでしょ？」

「結構混んでますね」

会場となるイベントセンターに着き、ハイブリッドバンを臨時駐車場に止めて。

二人で必要な荷物を持って正門付近まで行くと、開門直後にもかかわらず長蛇の列ができていた。

「人は多めみたいですね。暑いですし、とりあえず早く入場してしましましょう」

遙斗と瑠貴は、軍隊アリののように延々と伸びる列に並んで混じる。先頭は曲がり角で

見えないが、ざっと百メートルぐらいの長さといったところ。

入り口でオープンクラスの運営協力費として五百円を支払い、公的な身分証明書を提示。身分証明書に記載されている氏名を入力してエントリーシートが発行される、という煩わしい仕組みが長蛇の列の原因だった。

ペラ紙一枚のエントリーシートを配り、左手にスタンプを押すだけだった昔と比べて、水際での参加者の管理は徹底されている。過去、悪質な不正エントリーがいかにも横行したかの証左でもあった。

「隅の方のテーブルは、まだ空いてるようですね」

広大なピットスペースには、レース場を囲うように大量の長テーブルとパイプ椅子が配置されている。無事にエントリーを済ませた二人は、そのピットスペースの隅の方に対面して座る。

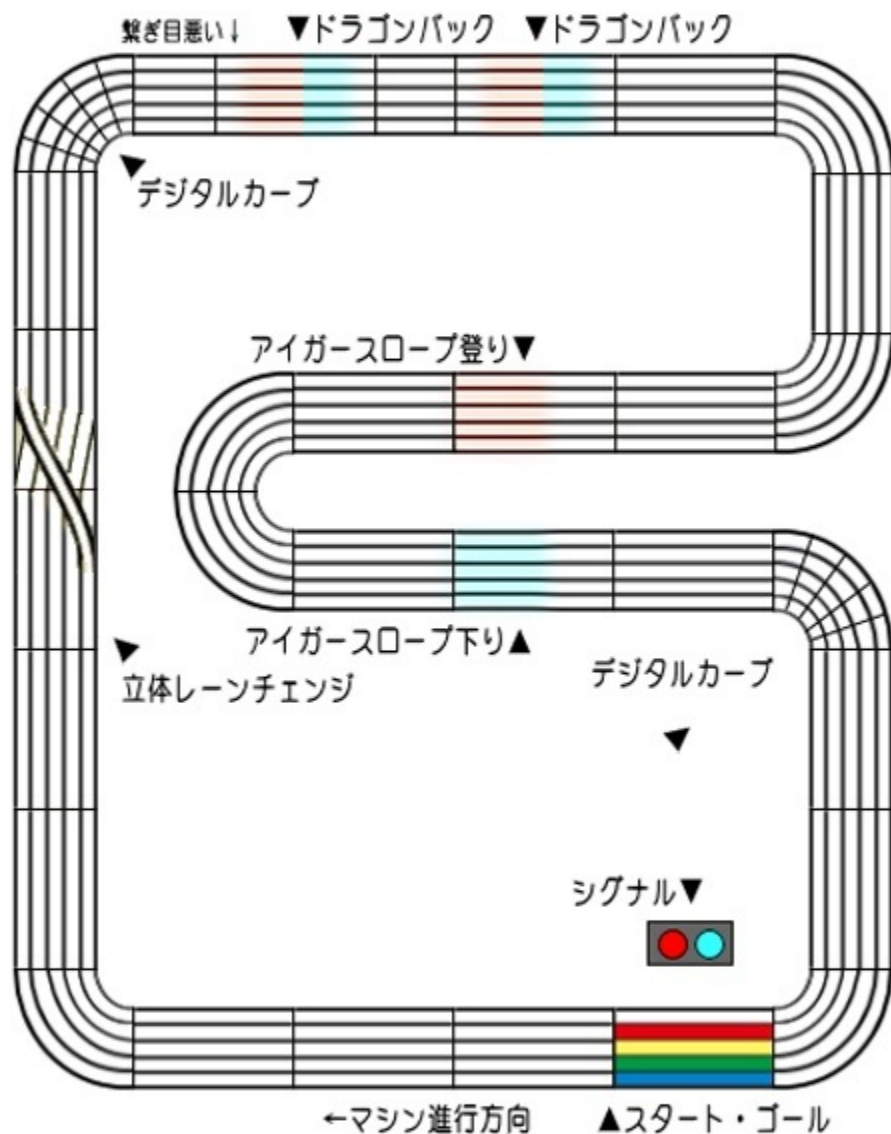
「コースレイアウトは、それほど凝ってるわけではなさそうですね。スピードレースになるかも」

ピットボックスを開けながら、コースの方を見やる瑠貴につられ、遙斗もコースの方に目を向ける。

ジュニアクラス用に一セット、オープンクラス用に二セット用意してある関係か、それぞれのコース自体はさほど長いものではなく、上から見ると凹字型に近い形をしている。中盤で大昔はヒルクライムと呼ばれ、今はドラゴンバックと呼ばれている丘のようなセクションが、ショートストレートを挟んで二つ連結されており、駱駝の背中のような様相を見せているのが特徴的だった。レーンチェンジは立体交差型。凹字のへこみ部分にはU字のテーブルトップになっている。ジュニアサーキットのテーブルトップより高さがある、アイガースロープだ。

直線が多くスピードに乗りやすいレーンチェンジに、二連結のドラゴンバックとU字アイガースロープ。さらに、アイガースロープ直後の九〇度カーブは、局面ではなく平面を組み合わせたような形で、マシンを左右に揺さぶり不安定さを誘発するデジタルカーブとなっている。

ジャパンカップオープンクラス 予選レイアウト



ドラゴンバック
(旧称: ヒルクライム)



アイガースロープ



デジタルカーブ



立体レーンチェンジ

【注意】 このレイアウトは、本作品用に考案した想像上のレイアウトです。実際のジャパンカップとは一切関係がありませんので、ご注意ください。

遙斗にはかなり難易度の高いコースに見えるのだが、瑠貴の見立ては違っているようだ。

「今では割と平均的な難易度ですね。グレードアップパーツの、衝撃吸収タイヤが開発されるまでは、かなり難しいレイアウトだったようですけど」

ミニ四駆に採用されているのは、通常はノーマルゴムやシリコン製のムクのタイヤなのだが、スロープの着地で全く跳ねないという謳い文句の、特殊衝撃吸収ゴム製のタイヤは、恐ろしく高価ながら確かな効果があった。第二次ブーム時代のショック吸収タイヤとは違い、特殊ゴム専門メーカーと共同開発した新素材を採用することで、タイヤの素材から超衝撃吸収性を追求したことが違っていた。

「フロントが、二つ目のドラゴンバックに引っかかりさえしなければ、確かに問題はなさそうですがね」

「越えるのはいいの。スピードがどうかっていうのをお忘れのようね」

声は背中から聞こえてきた。

「あ、^{あとまち}後町さん。ごきげんよう」

瑠貴は優雅に立ち上がると、ぺこりと軽く頭を下げる。

遙斗が振り返ると、さすがに少女と呼ぶには歳が行き過ぎている、大学生ぐらいの年齢の女性が立っていた。

「ごきげんよう、瑠貴っち……って、今日は麻梨奈っちじゃなくて、男連れなんだ。ははあさては」

「違いますから。こちらは、木藤遙斗さん。新倉模型の新しい常連さん」

言葉を遮るようにピシッと言うと、瑠貴は遙斗の方に視線を向け、右手を後町と呼ばれた女性の方に向ける。

「紹介しますね遙斗さん。この方は、^{あとまちあかね}後町朱音さんと言って、ジャパンカップ東海北陸地区予選の優勝者なんですよ」

「朱音でいいわ。今日は出ないけど、もし明日対戦することになったらお手柔らかに」

左手を差し出す朱音。よろしく、と短く返事して握手する遙斗。

「朱音は少し離れたところに、地元組と一緒にいるから。笠宮さん達もまた顔見せに来てちょうだい」

言い残すや否や、あっさりときびすを返す朱音。すぐに他のテーブルへ移動し、同じように挨拶に行っていた。

「あの人は顔が広いですから……彼女の周囲の人も強いですよ。気を引き締めてくださ

いね」



広いピットスペースも、レース開始時間のだいぶ前には既に人で埋まっていた。この予選が最後のチャンスだけに、参加者も多い。

「では、エントリー番号二〇〇番までの選手、車検場へお越し下さい」

ウグイス嬢のマイクを通じた声が、スピーカーを通して会場内にこだました。深夜に録画で一部始終を放送する地元ケーブルテレビ局と、ライブ配信しているインターネット中継のために実況席が設けられているので、司会進行と選手呼び出しは別々に行われている。複数台のカメラを使い、さながら冬季競技のスキークロス中継によく似たアングルで映像は配信される。

「遙斗さん、一八八番ですから行かないと」

瑠貴に声をかけられ、マシンの調子を見ていた遙斗は顔を上げた。既にメンテナンスも電池交換も済ませている。あとは初戦に臨むのみ。

「では行ってきます」

「ええ、行ってらっしゃい……私も見に行きますけど」

マシンを持ち、遙斗はオープンクラスの列に並ぶ。瑠貴はスタート台を正面に見える場所、仁王立ちする朱音の横にちょこんと陣取る。なるほどナンパの心配はなさそうだった。

順調に列は捌け、いよいよ遙斗の番が回ってきた。最低地上高、全幅、全高、モーター、バッテリー種別、ローラー枚数、マスダンパー配置の検査を無事クリアし、エントリーシートにチェックマークが入る。マシン上部に貼られたレーン番号シールは三番。

「よかった、三コースなら悪くないわ」

「ええ、今日の鬼門は一コースだしね。大して名の知れた選手もいない組に入ったし、練習通りの走りならいけそうね彼」

瑠貴と朱音はコースを見たまま頷き合う。

前の組のレースが終わり、遙斗の組が一番前に押し出された。

強いライト、レッドランプが点ったシグナル、ぐるりと取り囲んだ観衆。フリーコースでの練習走行とはまるで違うその雰囲気、遙斗の足の裏から感覚を奪ってゆく。地に足が付かない、この感覚は実に久しぶりだった。

「スイッチオン」

スタート台の制御ハンドルを持ったスターターが、五人の選手に促す。スイッチを入れ、斜め四五度にセットされた青色のコース上に、マシンを構える。五台のモーター音が唸りを上げる。

ごくり、と誰かの喉の音が鳴ったと思った刹那。

ピーーツ！

けたたましい音とともに、シグナルが赤から青に変わる。

——シグナルスタートには、ちょっとしたコツがあるんですよ。

練習走行直後に言われた、瑠貴のアドバイスを忠実に守った遙斗のテラスコーチャーは、素晴らしいスタートダッシュで一気に先頭を奪った！

「一次予選スタート！ 三コースがいいスタートを切った、これは速いぞ」

スタートの直線で一気の後続を突き放し、九〇度カーブを綺麗に曲がる。

関門となる高速立体レーンチェンジはまだ中盤。レーンチェンジの橋桁の下をくぐり、もうひとつ九〇度カーブを曲がると、このコース最大の関門、ドラゴンバックが控える。

「先頭がドラゴンバックに突入、ひとつめ、ふたつめも……うまく越えた三コース」

遙斗のマシンはブレーキを使い、うまく減速させるのはいつもと同じだが、今回は後方重量をより増加させ、着地時にややフロントが上を向くようにセッティングしてある。二つ目のドラゴンバックの斜面に対し、フロントが引っかからないように侵入して越えてゆく作戦が功を奏した格好だ。

ドラゴンバックを越え、さらにふたつの九〇度カーブを過ぎると、今度はU字型に組まれたアイガースロープ。ここもブレーキングでうまく制御して難なくクリアし、一周目を終えて後方とは約ストレート三枚分の差をつけた。

「二周目、三コースが順調に後続との差を広げているぞ」

ストレートの加速力は、車重が軽い分だけ他のマシンに勝っているのか、ドラゴンバックやアイガースロープでの減速でやや詰められる差も、ホームストレートで広げることができている。

加速するごとにコースアウトの不安は増えるが、三周目のレーンチェンジとドラゴンバックも、やや不安定になりながら何とか越えて五周目。

「ファイナルラップに突入……依然トップは三コース、続いて五コースと二コースが追い掛ける！ 四コースはだいぶ遅れたか」

既に一コースは序盤でコースアウトしていた。どうやら一コースのドラゴンバック付近は、フェンスの噛み合わせがよくないらしい。

速度が乗って一番不安が大きくなる、五周目のドラゴンバックも見事クリア。後続二台はドラゴンバックを一気に飛び越えようとする作戦が裏目に出てコースアウトし、勝負あり。遙斗のテラスコーチャーはアイガースロープを無事越えて、自分のレーンに戻ってきた。

「ここで三コースがゴールイン！」

司会の声とともに、スターターが手に持ったフラッグを振る。遙斗は、静かに右の握り拳をぐっと握った。

「よかったですね」

「きみきみ、素晴らしい走りだったじゃない」

コースから出た後、瑠貴と朱音、それぞれから声をかけられる。遙斗の左手には、メーカーマークと番号の刺繍が施された、青色の短く丸い紐が握られていた。一次予選突破証の「タスキ」と呼ばれる紐である。

「ありがとうございます、おかげさまで何とか」

遙斗は軽く一礼。勝てるという自信はあったが、あそこまで圧勝できると気分もいい。

「一次予選でもトップ三に入るタイムもさることながら、何より見てて気持ちのいい走りをしてたね、キミのマシンは」

遙斗の背中に、かなり渋いような高いような、特徴のある男の声が掛けられる。

「およっ、まいちん」

歩いて寄ってきた三十代後半ぐらいの男は、遙斗の知らない顔だった。背がやや高い以外はよく会場にいそうな風体だったが、いかにもベテランらしい落ち着きと雰囲気、他の選手とはやや一線を画していた。

「ああ紹介するわ、この人は舞浜^{まいはま}さんっていう古参のレーサーでね、みんなして『まいちん』って呼んでるんだけど、まあ選手会長みたいなもんだよね」

朱音が簡単に紹介すると、舞浜と呼ばれた男は軽く三回ほど頷く。

「いかにも、本名は舞浜^{まいはま}浩三^{こうぞう}だが呼び方はお任せする……笠宮さんのことは朱音ちゃんから噂を聞いてるけど、キミは初めて会場で見える顔だね」

「初参加ですので……」

「いやいや、あのきれいな走りには、いい雰囲気を感じたよ。このまま明日のステージまで行けるといいね、応援してるよ」

そうとだけ言うと、舞浜と名乗った男は颯爽^{さつそう}ときびすを返して立ち去ってゆく。

「何だったんでしょう……」

「まいちんに一発で認められるのは大したもんだねー。春は家庭の用事で不参加だったんだけど、元気そうで何よりね」

朱音はあっけらかんと答えたと思うと、しばらくして横手から今度は小綺麗な格好を

した、四十代半ばぐらいの女性が三人に寄ってくる。みるみる困った様子の顔になる朱音。

「あー、先に言っておくわ。あれ、うちの母親だから」

『ええ!?!』

驚いた声を上げる瑠貴と遙斗。

「数年ぶりに来たけど、レギュレーションやコースは大して変わってないくせに、昔とずいぶん会場の様子は違うわー」

「そりゃそうよ……って、母さんも出場する気で今回は来たの？」

「あらあら、母さんは朱音が産まれる前からミニヨンやってるのよ。さっきいたまいちゃんが、タスキ取るにも四苦八苦してたヒヨッコの頃から知ってるぐらいだしねー」

軽い調子で言うと、瑠貴と遙斗の方へと向き直る。

「若い子が増えたのはいいけど、昔から知ってる顔はめっきりいなくなったわねえ……まあでも、一通り楽しませてもらおうかしら。今の若い子達の熱意と実力を」

「……ここでゴールイン！ 勝ったのは四コース」

昼食後から始まる二次予選。

ここでも遙斗のマシンは、一次予選ほどではないにせよ二位以下を突き放し、トップでチェッカーを受けた。これで準決勝進出。

「ホントに薄っぺらですねこの参加券」

係員から受け取った次のラウンドへの参加券、いわゆる「薄紙」を右の掌に乗せてまじまじ見る遙斗。ハッキリ言って、オフィス用の普通紙よりもはるかに紙厚が薄い。ちなみに書かれている番号は十三番。

「昔からその厚さだったようですよ。」

薄っぺらでも、一度も取れずに引退するレーサーだっていっぱいいるようですから、薄いけど重みはある、な感じでしょうね」

「なるほど」

遙斗は瑠貴とともにピットスペースへ戻ると、飲みかけのコーラをぐいっと飲む。実にうまい。

一方、瑠貴はマシンボックスではなく、手荷物の方から箱をひとつ取りだし、いそいそと開けて何やらマシンを取り出す。

「次はコンクールデレガンスですし、そろそろ用意しないと……麻梨奈のコンデレマシン、これですよ」

「うわすげ」

遙斗は思わず感嘆の声を上げる。

いわゆるバハキング・ジュニアなのだが、砂漠のような砂地ベースに乗せたディオラマになっており、スケールモデルに用いる人形やら小道具を使い、砂漠レース途中の整備風景を作り出していた。バハキング・ジュニア自体も入念に塗装されており、ラリーカー風の仕上げ。ウェザリングの具合も絶妙で、スパイクタイヤがひたすら似合っている。

「これ、ミニ四駆のコンデレというより、スケールモデルのコンクールみたいな出来映えですね」

「でしょう？ マシン単品以上に、コンデレはこういった演出も大事なんだそうですよ……では、作品を置きに行きましょうか」

瑠貴は、昼食後に記入を済ませていたコンクールデレガンス用エントリーカードを遙斗に持ってもらうよう促すと、麻梨奈の作品を両手で抱えるようにして、コース横にあるコンクールデレガンス会場へと向かう。

受付の前は既に長蛇の列が出来ており、順番に係員へ作品とエントリーカード、コンクールデレガンス予選通過証明書を渡していく。コンクールデレガンスの夏の選手権は、ジャパンカップの地区予選会場で行われるコンクールデレガンスの優秀賞以上に出場権が与えられていた。

麻梨奈のコンデレマシンに振られたエントリーナンバーは十二番。三段式になっている棚の中段に配置された。かつてはレーサーが自由にテーブルへコンデレマシンを配置できたが、場所による有利不利がないよう、現在は係員が配置を決める方式となっている。

「これより、コンクールデレガンス夏の選手権を開始いたします。

順路に沿ってご観覧いただき、車検場に設けられました投票箱へ、エントリー番号を記入した用紙をご投票ください。

作品を置いてある棚と仕切りのアクリル板にはお手を触れないよう、また観覧中や投票所へお並びの際、押し合わないようお願いいたします」

ウグイス嬢の放送が流れ、コンクールデレガンスが始まった。公平性を期すため、レーサーの投票によって上位から順に最優秀賞一台と優秀賞三台、タミヤ賞四台を選ぶことになる。かつての公式レースのオマケ企画に等しい存在から、メーカー公認の模型コンテスト扱いへと格上げされた格好だ。

組織票の存在など公平性を欠く問題も多いと囁かれるが、運営スタッフの独断で選んでいた昔よりはマシ、との意見が大勢だったりするらしい。

「へえ……」

居並ぶ三二台の力作を見て、思わず感嘆の声を上げる遙斗。瑠貴は慣れてるせいか、歩きながらも声を上げずじっくりと見る。

「ちょっと、前に進んでくれるかな？」

「あっ、すみません」

後方から促され、慌てる遙斗に瑠貴はくすくすと笑いながら振り返る。

「これ慣れてないと、なかなかじっくり見れませんよね？ 私も最初は、後ろの人に全く同じこと言われましたよ」

瑠貴は右手で遙斗の左手を握り、列の動く速度に遅れないよう遙斗を引っ張り始めた。

二人は手を恋人繋ぎにしたままコンデレマシンを一通り鑑賞すると、今度はレースの車検場に並び、車検台の上に設けられた投票箱への投票。ひとり一票なので、紙に十二の番号を書き箱の中へ。

「さて、どうかしら……」

投票後、二人は物販横の自販機で飲み物を買って、自分のピットへ着席する。あとは投票結果を待つのみ。

しばらくして、電光掲示板代わりに車検場の横へ設置されている、五十五インチ液晶テレビに番号が表示された。

起こるとよめきは、歓喜か嘆息か。

十二番の番号は、並んだ番号の一番下に表示されていた。

「あ、タミヤ賞のようですよ」

瑠貴の声は、普段より一オクターブは高かった。

「あちゃ、タミ賞止まりだったんだー……まあしょうがないねっ、あれは八割方が運だし、ボウズじゃなかっただけ御の字さっ」

瑠貴のスマートフォンの向こうから、割と鮮明な麻梨奈の声が遙斗にも漏れ聞こえてくる。

係員より受け取ってきた、システム手帳サイズの入賞盾と表彰状、粗品と呼ぶに相応しい記念品を目の前に見ながら、瑠貴は早速麻梨奈に結果を電話していた。

「うん、それもそうね。明日はこっちに来るの？」

「もちっ、瑠貴の活躍見ないとだからねっ、遙斗くんも男だったら絶対予選突破するんだよって伝えといてっ」

瑠貴に伝言されずとも、その元気な声はスピーカーから漏れて遙斗に丸聞こえ。さらにひと言ふた言ほど麻梨奈と話した後、瑠貴は電話を終えた。

「麻梨奈もああ言ってますし、頑張ってくださいね」

「もちろん」

遙斗は力強く答えると、コースの方を見やる。

走りに多少不安を覚えたのか、遙斗はローラーベアリングの洗浄を徹底するとともに、フロントローラーのスラスト角度を一度だけきつめに変更。リアブレーキを調整し終えたところで、呼び出しのアナウンスが流れる。

「では、これよりオープンクラスの準決勝戦を開始いたしますので、選手の方は車検場にお越し下さい」

本来なら準々決勝の用意もあつたらしいが、予想より完走率が低かったためか、二次予選の勝ち上がり人数が二十五名ちょうどだったため、五人ひと組で準決勝が行われるということだった。

準決勝といっても、レースの進行は一次・二次予選とさして変わらない。本大会の明日は最初から選手紹介がコールされるらしいが、最終予選日は決勝のみのコールとなる。

「続いて、準決勝の第四試合！」

いよいよ遙斗の出番が回ってきた。進行は同じでも、会場全体の緊迫感が遙斗にも伝わってくる。慎重にスイッチを入れ、スタート台にマシンを構える。コースは五コース。

ピーーツ！

シグナルが青に変わり、五台のマシンが横一線にコースインする。

「全車一斉にスタート……リードを奪ったのは一コースだ、続いてそれを五コースが追い掛ける」

「……っ」

最初のホームストレートで、抜群の加速を見せた一コースの赤いエアロマンタレイは、遙斗のテラスコーチャーを二台分ほど突き放す。力強くコーナーを駆け抜け、ドラゴンバックとアイガースロープを揺らぎもせず攻略してみせた。これまで予選を戦った相手とは根本的に性能が違う。速いというより、強い。

その一コースのレーサーを横目で見てみた。

「……あれ？」

遙斗はやや間の抜けた声を漏らす。その一コースにいるのは……

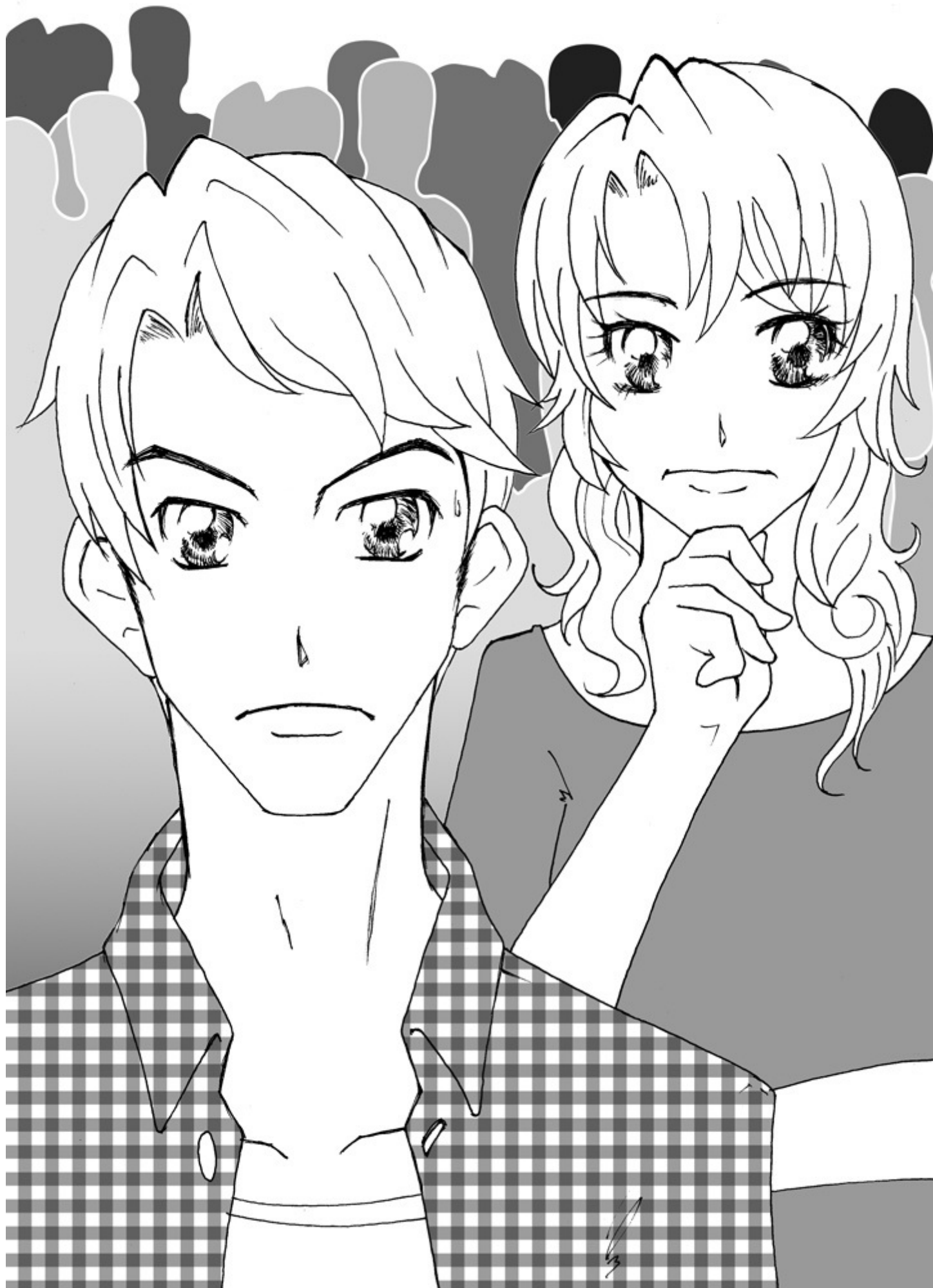
「あれ、セッティング数年落ちのマシンの走りじゃないわね……びっくりした」

「すごい……」

スタート台の真横に陣取り、ストップウォッチ片手に開いた口が塞がらない感じの朱

音の横で、瑠貴がぼそつと言った声が、遙斗の耳へと僅かに届く。

軽くウェーブのかかった髪ををなびかせ、腕を組んで仁王立ちにマシンを見守る姿は、ブランクを微塵も感じさせない。帰ってきた歴戦のレーサーこと、朱音の母親が遙斗の視線の先にいた。



2周目-3

「二周目に突入、徐々に一コースと五コースの二台の争いに絞られてきたか」

実況の声で我に返った遙斗は、慌ててコースへと視線を戻す。気がつけばマシン三台分ほど離されている。後続三台はさらにその後方。

再びドラゴンバックを乗り越え、コースを駆け抜ける二台のマシン。二次予選より速度は多少上げてはいるのだが、ストレートで突き放された分を一気に詰めて追いつくまでには至らない。

「ドラゴンもアイガーも、私が独身だったときからやり込んだセクションですもの……基本的な攻略のポイントは、時代が変わっても同じ」

スロープを抜ける速度はほぼ互角。それでも、軽量級マシン独特の燃費のよさを活かし、四周目でマシン二台分差まで詰め寄るが、なかなか追いつけない展開でファイナルラップ。

――だめか

「最後にインへ入ります、まだ諦めてはだめ！」

内心あきらめが出始めていた遙斗を励ますように、鈴の音の音が横から飛ぶ。横目で見ると、両手を組み祈るような表情でコースを見つめる瑠貴の姿。

「接戦のままファイナルラップだ……先頭は変わらず一コースか、おっとレーンチェンジで五コースも差を詰めたぞ、これはまだわからないか」

立体レーンチェンジと直後の九〇度カーブを越え、二台分あった差は一気にその半分以下まで詰まる。

そしてドラゴンバックを越えた後のストレートで、ついに遙斗のテラスコーチャーは深紅のエアロマンタレイをとらえてその前に出た！

「いけ」

遙斗の静かな気合いとともに、二台はスロープへと突入する。逆転した遙斗のマシンは車体一台分ほどのリードを奪っているが、アイガースロープだけはアウトコースを走るだけに、勝負はまだ分からない。

「このスロープが最後の勝負だ……先にスロープを降りてきたのは、これはほぼ同時か、さあ先にゴールするのは」

二台はほぼ同時に水平になっているスタート台の下へと吸い込まれ、半呼吸遅れてチェッカーフラッグが振られる。

「……どっちだろう」

「同着だったようにも見えたんだけど……」

周囲がざわめく中、スタート台の係員は慌てて実況席へと行き、モニターでリプレイ

を確認。どうやら映像判定らしい。

大型液晶テレビにもリプレイが映し出され.....

係員の掌はいつぱいに開かれ、五本の指が示されると、今日一番のベストマッチに大きな歓声と拍手が沸き起こった。

「もう、本当にドキドキしましたよ」

「バンパー半分もない僅差なんて、なかなかない名勝負ね！」

「ありがとうございます」

コース脇で第五試合の結果を待つ遙斗に、瑠貴と朱音が声をかけた。決勝は公開車検となるため、ピットには戻らずそのまま決勝戦が行われる。

「素晴らしい勝負を見せてもらったよ」

「もうちょっとだったけどねえ.....電池が最後まで保た^もなかったわね。勝負事だから仕方ないけど、久しぶりに楽しませてもらったわよ。お見事」

女子ユニット二人のすぐ後ろから、年齢的に渋い男女の声が遙斗に向けられた。

「いえ、運とコース取りがよかったです」

舞浜と朱音の母親に向かい、遙斗は謙遜したように言う。

「公式で勝つってね、何よりそこが大事なのよ。よく覚えておきなさい」

「その通り、マシンは完璧でもツキがなければ勝てないものだからな.....そこがモータースポーツ本来の醍醐味でもあるが」

したり顔で悟ったような台詞を決めて舞浜が頷くと同時に、第五試合が終わり係員が遙斗を含めた決勝進出者を呼びに来た。

「決勝は緊張すると思いますが、レース自体はそれまでと同じ運びですから、落ち着いてくださいね」

「頑張るんだよー」

「自信を持って臨めば必ずマシンは応えるはず。応援しているぞ」

「ほらほら、ぼーっとしてないで早く行きなさい」

四人からそれぞれに言葉をかけられる遙斗。しかしよいよ決勝、と思うだけで体が金縛りにあったように緊張してくる。足を動かそうにも動かない。

「あ、こりゃ相当緊張してるわ。心臓小さいなー」

朱音が呆れたように言う。その言葉が終わるや否や、瑠貴は意を決したようにカンカン帽を取り朱音の方へ押しつけると、遙斗の左肩を掴み、無理矢理自分の方へと振り向かせた。

「遙斗さん、おまじないしてさしあげます」

優しく言いながら、瑠貴は遙斗の額に己の額を合わせる。その刹那、遙斗は回りの音がサッと途絶えたように感じた。



「なんとかなるから」

目を瞑った瑠貴の、控えめな桜色の唇が動く。そのスローモーションのような唇の動きひとつひとつが遙斗の双眸へと入るたび、己を縛っていた緊張の糸がするすると解けていくように感じた。

「さ、行ってらっしゃい」

瞳を開いた瑠貴が、額を遙斗から突き放すように離すと、遙斗の世界に再び音が戻ってきた。

しかし、それまでの緊張が嘘のように消え、心は妙に落ち着いていた。いける。

「うん、行ってきます」

遙斗は力強く瑠貴達に頷くと、車検場へと歩を進めた。

準決勝は全レースで勝ち上がりがあったため、五人で決勝が行われる。それぞれのマシンを確認し、違反がないかをお互いチェック。

「それぞれ、異議はありませんね？」

『はい』

係員の問いかけに、五人全員が同じ答えを返す。係員は頷くと、新品の乾電池を順に手渡し、五人は支給された電池に積み換えた。

「それでは、これより決勝戦を始めます。皆様、盛大な拍手で入場選手をお迎えください。一コース……」

以前は、入場コールは直前に本名か選手名を書いて申請する形式だったが、何かしら社会生活上の支障が考えられるなど、選手名を希望する特別な理由がない限りは、エントリーシートに記載した本名にて呼び出しが行われる。

「四コース、木藤遙斗選手！」

コースの周囲からは、盛大にとはいかないまでも、まんべんなく拍手が起きる。遙斗はやや硬い表情でスタート台まで歩を進めた。

「FDBサマースペシャル・タミヤミニ四駆全日本選手権ジャパンカップ、最終予選決勝戦！」

赤いシグナルに灯が点り、スタート台が斜め四五度に傾けられる。

「全車、スイッチオン」

スターターの声とともに、五台のマシンのスイッチが入り、スタート台に構えられた。

ピーーツ！

「決勝戦、全車一斉に綺麗なスタート……これは横一線、接戦になりそうだ」

スターティングの技術はほぼ互角なのか、綺麗に横一線にコースインすると、ホーム

ストレートもほぼ横一線のまま立体レーンチェンジに入る。

ドラゴンバック、スロープでもほとんど差がつかずに二周目へ入るが、ここでも大きな差は付かず三周目へ。三位までは明日の本大会への出場権を得られるが、決勝は五人なので二人は脱落することになる。僅差の接戦に、会場の緊張感もさらに高まってゆく。

「接戦ね……遙斗くん以外は提灯系が二台にサスが二台、どれもいい走りしてるわね」

朱音がストップウォッチを片手に唸る。瑠貴は準決勝と同様、手を組んで祈るように見つめる。その後ろで黙して見つめる朱音の母親と舞浜。

提灯とはマスダンパーの一種であり、考案から長い年月が経過して今や旧態依然といっている技術ではあったが、ボディー体型の低位取り付けなどバリエーションが多く、また制御効果が比較的高いため、陳腐化した今でもシャフトドライブシャーシのマシンにはよく用いられている。衝撃吸収タイヤも絶対の効果ではないのだ。

「四周目に突入……おっと三コースがコースアウト、残るは四台」

やはりドラゴンバック周辺の継ぎ目の悪さが祟ってか、一台が斜めに弾かれる。五台同時に侵入する分、それぞれのマシンにかかる衝撃も大きい。

「いよいよファイナルラップ！ これはどうも、最後まで勝負の行方は分かりそうにない」

ほぼ互角のまま立体レーンチェンジへ。ここでマシン一台分前に出ていた、一コースのライジングエッジがレーンチェンジで減速、変わってすぐ後ろにつけていた遙斗のテラスコーチャーが先頭に出る。

「よしっ、先頭取ったわね」

「ここだな」

「そうね。ドラゴンできちんとリードを広げられれば」

「……お願い……」

四人の声が交錯する中、ドラゴンバックの継ぎ目で引っかかり、ライジングエッジはさらに大きく減速。マシン一台から二台分ほど後方にいた、二コースと五コースの集団に吸収される。

「さあ最後のスロープだ……あっと、先頭の四コースが下りでバランスを崩した！」

『!!』

うまくアイガースロープ直後のデジタルカーブを抜けたかと思われたが、最後にバランスを崩し、テラスコーチャーは横へと横転！

かろうじてひっくり返るのは免れ、慣性によりサイドローラーで横立ちとなり前には進んでいるが、再び二台を突き放した一コースのライジングエッジが、後ろからみるみるテラスコーチャーを追い詰める。ゴールまであとストレート一枚半。

「戻れッ!!」

「もどって一ッ!!」

遙斗と瑠貴、二人の声が木霊する。

そして、その声に応えるかのように、慣性で進んでいたテラスコーチャーは再び横へと転がり、四輪のタイヤで白いコースの路面をしっかりと掴んだ!

『おおっ!?!』

「もどったッ!」

「やったっ!」

会場のどよめき、朱音の驚愕、瑠貴の歓喜……三つの声が入り混じる中、再び力強く走り出そうとするテラスコーチャー。

スロープを下って、猛然とした加速で迫ろうとするライジングエッジだったが、こちらにもスロープの着地でバランスを崩し、やはり横倒しになる。

「おっと、一コースも横転! サイドローラーで前には進んでいるが、そこから最後に残った二コースがやってきたぞ! ここで四コースが再び元に戻ったが、果たして逃げ切れるか」

五コースがスロープ登りでコースアウトしたため、残った二コースのエアロバンテが、後ろから加速しつつもスロープを無事着地し、ライジングエッジをかわしてテラスコーチャーに迫り来た!

そして、テラスコーチャーとエアロバンテは、同時にゴール台の下へと吸い込まれる。

『どっちだ……?』

会場がさらに大きくどよめく。スタート台の係員は実況席のモニターへ。会場の液晶テレビにはリプレイが表示される。

「これは……」

「負けたかな」

スタート台の係員が示した指は……二本だった。

リプレイ画面は、わずかローラー半分の差で、ゴールラインをエアロバンテの方が早く切っている瞬間を映し出していた。

素晴らしい接戦に対する大きな拍手に送られながら、遙斗は肩を落として瑠貴達の元へと戻ってきた。

「惜しかったですね……また明日がありますし、頑張りましょう」

「そうそう、予選は出場権取るのが目的みたいなもんだから、三位以上の順位並びは正

直あんまし関係ないもの。おめでとうだよ！」

瑠貴と朱音に励まされるが、遙斗の悔しさはおさまらない。

「どう、楽しかったでしょ？」

「うむ、このシチュは楽しくないという方がおかしいだろうな」

「え……？」

満面の笑みで、意外な問いかけをしてきたのは、朱音の母親と舞浜だった。勝負事だけに、やはり負けたのは悔しいものなのだが、楽しかったかとは一体どういうことなのか。

舞浜は続けた。

「勝って大金が手に入るわけでもない。そして、負けて失うものは何もない。

そりゃ勝てば名誉や賞状は得られるだろうが、プロスポーツや五輪の選手みたいな『生活に関わる名誉』ではなく、所詮は『趣味の名誉』に過ぎんのだ」

「もちろん真剣に挑むのは一番大切なことだけど、ミニ四駆はアマチュアスポーツの世界だから楽しんだもん勝ち。一時の勝った負けたでムキになっても損するだけよ。レースできることを存分に楽しんで、そして決勝の舞台に立てることを感謝して喜ばないとね」

朱音の母親が舞浜の言葉を引き継ぐと、視線を奥にやった。

「見なさい、あの子を。ああなってはいけないわね」

視線の先には、遙斗と似たような年齢だろうか。笑顔ひとつ無く、ただふて腐れるのみ。ひとり三位の表彰を待つライジングエッジの持ち主の男がいた。

「準優勝は、木藤遙斗選手です。表彰台にどうぞ」

アナウンスで我に返ると、遙斗は慌てて振り返り、表彰台へと歩を進める。

「おめでとうございます。木藤選手には明日行われます、FDBサマースペシャル・タミヤミニ四駆全日本選手権ジャパンカップ、オープンクラスチャンピオン決定戦への出場参加券と、賞状・記念品が贈呈されます」

表彰台の端へ登った遙斗に、初老の男性が歩み寄ると、遙斗へ大判で厚手の賞状と小さな箱、そして小さなレター封筒を渡した。封筒の中身が明日の本大会への案内状と参加券らしい。

「最後まで目が離せない、いいレースをありがとう」

初老の男は遙斗にそう声をかけると、会場からは大きな拍手が起きた。

遙斗はありがとうございます、と返すと目を上げ、会場を見た。

少しだけ高い位置にいる自分に、大人と子ども、会場中の視線が集まっていた。

——ああ、そうだ。

遙斗は思う。子どもの頃、地方の田舎に住んでいた遙斗は、ずっと離れた会場で開催される公式レースに出場したのは、三度きりしかなかった。

そして、その三度はすべてよく覚えている。この白いコースで走らせることができる。その喜びでいっぱいだったから。

子どもの頃に感じていた、そのささやかな喜びを、遙斗はあの少女の姿とともに、表彰台の端で噛み締めていた。

——レースできること存分に楽しんで、そして決勝の舞台に立てることを感謝して喜ばないとね。

朱音の母親が行った言葉の意味が、遙斗にはようやく分かったような気がした。

あとがき

瑠貴や先輩レーサー達の助けもあり、かろうじてジャパンカップへの切符を掴むことができた遥斗。

朱音や舞浜たちをはじめ、絶対王者・檜海ら全国から集う強豪を相手に、遥斗と瑠貴は果たしてジャパンカップ本大会を勝ち進むことができるのか？

二人に、そしてレーサー達にジャパンカップの最後に待っている結末とは――

続きは有料版にてお楽しみください。(電子書籍版のほか、オフセット紙本版の直販もしています)

ファイナルラップ！

(電子書籍版1-2周目)

2015年2月5日 初版発行

著者：悠川 白水

イラスト：がっかりうどんぬ

発行サークル：白水の小説棚

※この作品はフィクション（同人誌）です。実際の人物や団体、企業等とは一切関係がありません。

※作品中に登場するミニ四駆は、株式会社タミヤの登録商標です。

(C) 2014-2015 Hokusui Harukawa (Illust : Gakariudonnu) All Right Reserved